

高齢者疑似体験による教育学部学生の高齢者に対する意識の変化

The change of students' perceptions toward the elderly
by simulated experience of the elderly

森 宏 樹
郷 木 義 子

I はじめに

65歳以上の高齢者の総人口に占める割合は、昭和60年に10%を超え、その28年後の平成25年には25%となり、4人に一人が高齢者となった(1)。平成32年には30%を超えると予測されており(2)、日本はさらに超高齢社会へと進行している。平行して核家族化が進み、三世代世帯の全世帯に占める割合も昭和61年の27%から平成24年には18%に減少した(3)。

このように、高齢者人口は増加する一方で、高齢者と同居する子どもの割合は減少するとともに日常生活において高齢者と接する機会が減少した結果、子どもが高齢者の身体的特徴や心理的特徴を把握し理解できる機会が大幅に減ってきている(4)。

このような現状において、高等学校や中学校などの教育現場では高齢化社会に対応する子どもの学習の充実拡大が図られている。高等学校学習指導要領(平成22年)において、科目「家庭総合」では「高齢者の生活と社会」、科目「家庭基礎」や「生活デザイン」では「高齢期の生活」に関する内容が設定されており、高齢期における身体的特徴と心理的特徴について理解させること、そして、高齢化の現状と今後の解決すべき社会的課題について理解させることを目標にしている(5)。また、中学校学習指導要領(平成20年)の「家庭科」では、高齢者についての項目は設定されていないが、「家族・家庭と子どもの成長」の学習において、「高齢者などの地域の人々とのかわりについても触れるよう留意すること」とされている(6)。

しかし、大学における高齢者理解への教育的取り組みについての統一的な指針はない。むしろ、各学部で輩出する人材がどのような分野に進むかにより、取り組みは大きく違っている。また、青年期にある大学生は、祖父母との同居経験が無ければ、高齢者の身体的特徴そして心理的特徴についての具体的な高齢者理解が難しいことが指摘されている(4, 7)。そのため、特に卒業後高齢者を対象とした職種に就く可能性の高い医療系学部では、講義を中心とした高齢者理解に加えて、高齢者疑似体験プログラムを取り入れ、高齢者への共感などの医療人としての態度を育む学部教育が多く実施され、その教育効果の有効性

も報告されている (8)。

高齢者疑似体験プログラムは、1978年に Hoffman と Reif によって開発され (9)、建築や心理学の分野での高齢者体験、そして高齢者理解のための教育に利用されてきた。日本においては、日本人の体格や生活様式に合わせて、1993年に長寿社会文化協会によって「うらしま太郎」が開発された (10)。このような高齢者疑似体験プログラムは、視野狭窄、関節可動部位の抑制、老人性難聴、手指の巧緻性低下など、加齢に伴う身体的衰弱を体験理解できると共に、身体的な不自由さに起因する心理面も体験可能となっている。

医療系学生は、卒業後高齢者に対する治療等に従事する可能性が非常に高く、高齢者への理解に対する関心や意欲は高いと考えられる。それに対して、教育学部系学生は子どもへの理解を深めることへの関心や意欲は高い一方で、高齢者に対する関心や理解しようとする意欲は薄いと考えられる。しかし筆者らは本プログラムを通して高齢者理解のみでなく将来、障がいをかかえる児童・生徒にかかわる可能性のある教育学部生を対象として、障がいをもつ意味やその理解へとつなげていく効果も期待して本プログラムを実施した。そこで、本研究では、高齢者疑似体験プログラムを活用した高齢者理解に対する教育効果について、および高齢者に対する意識の変化について調査したので報告する。

II 方法

1. 調査対象

2012年度および2013年度に A 大学教育学部教育心理学科に在籍し、ボランティア体験 I または看護学概論を受講する1年生128名 (内訳：女子118名、男子10名、養護教諭一種免許状取得希望者102名、特別支援学校教諭免許状取得希望者19名、認定心理士申請資格取得希望者7名) を対象として、6～7月期の高齢者疑似体験実施時に質問紙調査を実施した。

2. 高齢者疑似体験実施方法

高齢者疑似体験には、服部メディカル研究所・あいおい損害保険・東京ガスが開発した「うらしま太郎」を使用した。この高齢者疑似体験セットは、加齢に伴う75歳～80歳の高齢者の特性を擬似的に体験できる用具のセットであり、次の用具が含まれる。

- ① 耳栓：高音域を聞きづらくし老人性難聴を再現する。
- ② 眼鏡：周辺視野の狭窄、白内障による色覚変化や霧視を再現する。
- ③ 荷重チョッキ：前屈み姿勢を再現する。
- ④ 肘サポーター・重り：筋力低下による肘関節の緩慢な動きを再現する。
- ⑤ 手袋：手指の感触・圧感などの低下による、物の掴みにくさを再現する。
- ⑥ 膝サポーター・重り：筋力低下による膝関節の緩慢な動きを再現する。
- ⑦ 靴型サポーター：筋力低下により、歩く時につま先があがらず、つまずきやすい状態を再現する。

高齢者疑似体験セットを装着し、次の項目を体験するようにした。

- ① 自分の学籍番号および氏名を高さ6 mm x 幅100 mmの欄にボールペンで記入する。
- ② 指令書に書かれた商品（商品名とその価格が書かれてある紙）をホワイトボードから取り、小さな財布から商品代金（硬貨）を釣り銭の無いように出す。
- ③ 校舎内を歩き、階段を使い2階へ上がり、違う階段から1階に下り、出発教室に戻る。歩行距離は約100 mであった。

高齢者疑似体験セットの装着は、長寿社会文化協会において高齢者疑似体験プログラムのインストラクター養成研修会を修了した教員、そしてその指導を受けた教員や同学科2年生が行った。

高齢者疑似体験は、高齢者疑似体験セットを実際に装着し体験する者（体験者）、そして体験者の安全の確保を確保したり、そして体験者がどうしても実施不可能な項目を支援したりする者（介助者）の二人一組となって実施した。また、高齢者疑似体験実施前に、教員が高齢者の身体的な特徴について解説を行った。

3. 調査と分析方法

調査項目は以下の通りであった。第（1）項目は高齢者疑似体験実施前調査を行った。また、第（2）～（6）項目は高齢者疑似体験後に調査を行った。

- （1）例示された高齢者に対するイメージを選択（複数選択可能）し、例にない老人像は自由記述とした。
- （2）高齢者疑似体験で強く感じたことの自由記述。
- （3）高齢者疑似体験者を介助した感想についての自由記述。
- （4）高齢者疑似体験中に介助された感想についての自由記述。
- （5）高齢者疑似体験による、高齢者に対する認識や関わりの変化とその具体的な内容についての自由記述。
- （6）今後の高齢者への関わりについて感じたことについての自由記述。

自由記述内容については、調査項目毎にその内容に基づき類型化を行った。記述内容の出現回数は、文章中カッコ内に記載した。

Ⅲ 結果

1. 高齢者についてのイメージ

高齢者疑似体験を実施前に、調査対象学生の高齢者についてのイメージを調査した。5%以上の調査対象者が持つ高齢者についてのイメージとその割合を表1に示す。また、5%未満の調査対象学生が持つ意識を表2に示す。

その結果約半数の調査対象学生が高齢者に対して「どうして良いか分からない」と回答していた。また、「仕方ない」、「頑固で困る」、「疲れる」、「話しづらい」、「自分はなりた

くない」など高齢者に対して否定的なイメージだけを持つ学生が51%と過半数を占めていた。肯定的なイメージと否定的なイメージの双方を持つ学生が28%であり、「楽しい」、「付き合いたい」「知りたい」など高齢者に肯定的なイメージだけを持つ学生は21%であった。

表1 高齢者についてのイメージ(複数回答)

	割合 (%)
どうして良いか分からない	46.1
仕方ない	25.8
楽しい	24.2
頑固で困る	21.1
知りたい	18.0
疲れる	17.2
話しづらい	13.3
自分はなりたくない	12.5
付き合いづらい	8.6
羨ましい	6.3
付き合いたい	6.3
避けたい	6.3

表2 高齢者についてのイメージ(少数意見)

体が弱そう、気の毒だ、おしゃべり、物知り、明るい、話しやすい、のんびりと暮らしている、尊敬している、声大きい、ほんわかしている、話しやすい人と気むずかしい人がいる、自然にいつもいる人、いつも働いている、困らないが頑固
--

2. 高齢者疑似体験後の感想

高齢者疑似体験セットの用具を装着し、体験した項目は次の三項目であった。①自分の学籍番号および氏名を高さ6 mm x 幅100 mm の欄にボールペンで記入する。②指令書に書かれた商品(商品名とその価格が書かれてある紙)をホワイトボードから取り、小さな財布から商品代金(硬貨)を釣り銭の無いように出す。③校舎内を歩き、階段を使い2階へ上がり、他の階段から1階に下り、出発した教室に戻る。高齢者疑似体験セットの用具を装着した状態で、これら三項目を実施することにより、高齢者の身体的特徴やそれに起因する心理面を疑似体験した(写真1)。

写真1 高齢者疑似体験の様子



高齢者疑似体験後の感想の記述内容を分類整理した（表3）。記述内容は、「身体的な不自由さ」、「情緒的気づき」、「用具装着による感想」、「高齢者に対する肯定的な思い」、「危険箇所の発見」、「加齢に対する否定的な思い」の6つのカテゴリーに分類された。これらのカテゴリー内でも、「身体的な不自由さ」（計235回）に関する記述内容が最も多く、なかでも眼鏡による「霧視・視野狭窄による不自由さ」（90回）が顕著に多く記述されていた。五感による知覚の割合は視覚器官が83%を占めていることから（11）、視覚器官による周辺情報の把握や目標物の認識に対する著しい制限が反映されたものと推察される。「情緒的な気づき」に関する記述内容としては、「恐怖感」（21回）が最も多い結果となった。視覚が制限された状態での階段の上り下りが「恐怖感」増加の一因と考えられる。カテゴリー「高齢者に対する肯定的な思い」では、高齢者の「行動・心情への理解」（39回）が多く、高齢者への共感的な態度が見られた。

表3 高齢者を疑似体験した感想の内容分類

カテゴリー	記述内容	出現回数
身体的な不自由さ	霧視・視野狭窄による不自由さ	90
	体全体の不自由さ	33
	手指巧緻性の低下による不自由さ	33
	関節可動領域低下による不自由さ	28
	老人性難聴	23
	歩行の不自由さ	23
	作業に時間を要する	5
情緒的気づき	恐怖感	21
	不安感	7
	援助要望	2
用具装着による感想	疲労感	24
	不快感	4
高齢者に対する肯定的な思い	行動・心情への理解	39
	思いやりの気持ち	2
	高齢者への尊敬	1
危険箇所の発見	階段	15
加齢に対する否定的な思い	自己加齢に対する拒否感	1

3. 高齢者疑似体験者への介助についての感想

高齢者疑似体験者を介助した感想の記述内容を分類整理した（表4）。記述内容は、「介助についての意識」、「介助の方法や態度」、「体験者への身体的不自由さへの共感」、「体験の必要性」、「危険箇所の発見」、「介助や不自由さへの不共感」に分類された。これらのカテゴリーの中でも、「介助についての意識」（計71回）に関する記述内容が最も多かった。

「介助の必要性」(26回)を感じながらも、「介助に対する不安感・迷い」(43回)を強く持っていることが示された。また、介助することによっても、「疑似体験者の身体的不自由さへの共感」(46回)が多く記述されていた。さらには、介助に対する不安感・迷いが多かった事と関連して、介助方法や態度についての記述も見られた。

表4 高齢者疑似体験者を介助した感想の内容分類

カテゴリー	記述内容	出現回数
介助についての意識	介助の必要性の認知	26
	介助に対する不安感・迷い	43
	介助なしの危険性	2
介助の方法や態度	声掛けの重要性・必要性の実感	10
	相手の立場に立つことの重要性の認知	8
	介助方法習得の必要性	5
	観察の重要性の認知	4
体験者の身体的不自由さへの共感	不自由さの共感・認知・驚き	38
	視界の悪さの共感・認知・驚き	6
	聴力の悪さの共感・認知・驚き	2
体験の必要性	体験の必要性を実感	5
危険箇所の発見	階段・段差の危険性の認知	2
介助や不自由さへの不共感	不自由さに対する不共感	2
	介助なしでも出来ることを認知	1

4. 高齢者疑似体験時に介助されたときの感想

高齢者疑似体験時に介助されたときの感想の記述内容を分類整理した結果を表5に示す。記述内容は「介助に対する肯定的意見」、「介助に対する不満」に分類された。「介助に対する肯定的な意見」の中でも、「介助者への感謝」(72回)の気持ちを示す記述が顕著に多かった。しかし、介助に対する不満を示す記述(3回)もあった。

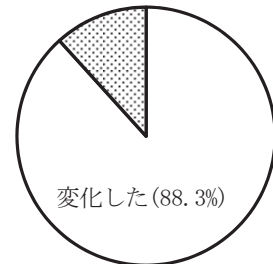
表5 高齢者疑似体験時に介助されたときの感想の内容分類

カテゴリー	記述内容	出現回数
介助に対する肯定的意見	介助者への感謝	72
	介助の必要性の認知	19
	介助による安心感	14
	介助の重要性の認知	6
	介助者への申し訳なさ	3
	声掛けの重要性の認知	5
	介助心の芽生え	1
介助に対する不満	介助者への恐怖感の実感	1
	介助者・被介助者の意識の相違の実感	1
	聴覚の面でのサポートの必要性の認知	1

5. 高齢者疑似体験による高齢者に対する意識の変化
 高齢者疑似体験後の高齢者についての意識変化を調査した結果、88.3%の学生が変化していた(図1)。高齢者との同居経験がなかったり、高齢者と触れあう機会が希だったりする学生にとっては、高齢者疑似体験は衝撃的であったと推察される。変化しなかったと回答した学生の記述内容を見ると、祖父母との同居経験があるなど高齢者と触れあう機会が多かった学生であった。

図1 疑似体験後の高齢者に対する意識の変化

変化しなかった(11.7%)



高齢者疑似体験の結果、高齢者に対する意識がどのように変化したかについての記述内容を分類すると、「身体的不自由さに対する認知」、「支援等の芽生え」、「高齢者に対する意識」、「加齢に対する不安」に分類された(表6)。「身体的不自由さについての認知」カテゴリーの「不自由さへの共感・認知」(71回)についての変化が顕著に多く記述されていた。さらには、高齢者の心理的特徴に対する認知の変化を訴える学生もいた。高齢者疑似体験前には、高齢者との触れ合いの仕方に不安を持つ学生が多かった(表1)。しかし、高齢者疑似体験後には、身体的な不自由さへの共感・認知が多くを占め、触れ合いに不安を持つ学生は減少した。

表6 疑似体験後の高齢者に対する意識の変化

カテゴリー	記述内容	出現回数
身体的不自由さに対する認知	不自由さへの共感・認知	71
	不自由さへの苛立ち	2
	不自由による恐怖の認知	3
	視覚の重要性の認知	5
	聴覚の重要性の認知	2
支援心等の芽生え	介助心の芽生え	29
	介助の重要性の認知	4
	思いやりの芽生え	4
	気遣いの必要性の認知	2
高齢者に対する意識	高齢者の心理的特徴の認知	12
	高齢者への尊敬	3
	相手の立場に立つことの重要性	2
	高齢者に対する無知さの確認	1
加齢に対する不安	加齢に対する拒否感の強化	1

IV 考察

高齢者疑似体験は、高齢者の身体的特徴の理解だけでなく、高齢者の心情理解を促す教育効果があると報告されている(7, 12)。しかし、高齢者疑似体験により高齢者理解に繋がるが、高齢者に対する意識の変化は、大きく変化しないという報告もある(13)。

本調査では、教育学部系学生を対象にした高齢者疑似体験により、高齢者の身体的・心理的特徴の理解の促進そして高齢者に対する意識の変化について調査した。その結果、高齢者のイメージについては約半数のものが「どうして良いかわからない」と回答していたが、核家族化の進行に伴い、三世帯世帯が減少し、高齢者と触れあう機会が極端に減少したことにより、高齢者に対しての対応について不安感を抱いている学生が多かったと推察される。高齢者の身体的特徴やそれに伴う身体的な不自由さについての理解は顕著になされており、身体的な不自由さから生じる心理面についての理解も多く、多くの学生で確認された。これらの点において、高齢者疑似体験は青年期にあたる大学生に共通して高齢者理解に対する学習効果が非常に高いものと言える。さらに、高齢者に対する態度や価値観の変容を促す教育効果も十分にあったと考えられる(表6)。

高齢者疑似体験後、高齢者に対する意識の変化としては、介助心の芽生え、介助の重要性の認知、思いやりの芽生え、気遣いの必要性の認知など高齢者を支援する意識の芽生えが多く確認できた。医学系学生を対象とした高齢者疑似体験による高齢者に対する意識変化の調査結果では、高齢者を支援する意識の芽生えに類する意識の変化についての報告はない。今回の高齢者疑似体験では、体験者と介助者各1名でペアを組んだため、介助者の体験者との関わりが大きくなり、支援する意識の芽生えが促されたと考えられる。また、対象学生の多くは養護教諭一種免許状取得予定者や特別支援学校教諭免許状取得予定者であるため、今回の調査対象者に特有な現象かもしれない。それらの免許状取得予定者は元来人に対して支援したいという素質を持っているとも推測され、身体的な不自由さや心理的な高齢者疑似体験者の身体的不自由さ、そして体験時の恐怖感や不安感を共感することにより、支援したいという意識が増強されたと推測される。しかし、どのような要因が、高齢者を支援したいという意識の芽生えに大きく寄与したかは、今後検証していく必要があると考えられる。

今回の高齢者疑似体験では、日常生活を模した三つの項目を実施した。しかし、時間、施設、疑似体験補助者そして使用可能な物品の制約により、実際の日常生活とは異なる人工的な環境と活動であった。種々の制約を取り除き、実際の日常生活に近い環境で、かつ日常生活動作に近い活動を体験することが、より実体験に近い高齢者疑似体験を提供し、より正確な意識変化を調査できると考えられる。しかし、今回の実施環境や実施項目においても、高齢者理解に対する十分な教育効果を達成できており、実体験に近い高齢者疑似体験を提供できたと考える。

今回の調査では、教育学部系学生を対象に、疑似体験による高齢者理解の教育効果と高

齢者に対する意識変化を調べた。高齢者の身体的不自由さ、そして心理面の理解に十分な教育的介入が発揮できたと考えられる。意識の変化においても、高齢者を支援しようとする態度の誘導に有効であったと考えられる。しかし、今回のような疑似体験は1回で完結している。ボランティア活動などを通じて継続的に高齢者と関わり、高齢者に対する態度や共感性を高めることが高齢者に対する支援をより充実させるものになるだろう。さらに、高齢者疑似体験は、体験者に共感的態度の向上や価値観の変容を促すツールとも考えられ、今後も有効に活用していきたい。

謝辞

高齢者疑似体験の実施にあたりご協力をいただいた先生方そして学生諸君に感謝申し上げます。

引用文献

- (1) 総務省統計局（2013）平成25年9月15日現在推計，総務省統計局
- (2) 国立社会保障・人口問題研究所（2012）日本の将来推計人口（平成24年1月推計），国立社会保障・人口問題研究所
- (3) 厚生労働省（2012）平成24年国民生活基礎調査，厚生労働省
- (4) 水谷信子，水野敏子，高山成子，高崎絹子（編）（2011）最新老齡看護学，日本看護協会出版会
- (5) 文部科学省（2010）高等学校学習指導要領解説 家庭編，文部科学省
- (6) 文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説 技術・家庭編，文部科学省
- (7) 藤野あゆみ，百瀬由美子，松岡広子，大澤ゆかり（2009）高齢者疑似体験前後における学生の共感性の変化，日本看護福祉学会誌，14(2)，135-146.
- (8) 栗原トヨ子，木之瀬隆，井上薫，大津慶子，新田収，寺山久美子，長田久雄（2004）保健医療系学生のため的高齢者疑似体験プログラムの意義 体験による高齢者に対する意識の変化の考察，日本保健科学学会誌，7(3)，194-199
- (9) Therese Lemire Hoffman and Susan Dempsey Reif (1978) *Into ageing: a simulation game*, C.B.Slack
- (10) 長寿社会文化協会（1993）WAC シニアシミュレーター〈愛称：うらしまたろう〉，WAC News Letter, 1
- (11) 教育機器編集委員会（1972）産業教育機器システム便覧，日科技連出版社
- (12) 相羽利昭，山村江美子，板倉 勲子（2003）高齢者疑似体験による高齢者イメージと高齢者理解の変化：看護学生の高齢者イメージの自由記述の内容分析から，聖隷クリストファー大学看護学部紀要，11,119-126
- (13) 筒井香織，西尾洋子，細田江美（2000）高齢者に対する看護学生のイメージ -高齢

者疑似体験グッズを使用して，飯田女子短期大学看護学科年報，3，181-198